日本語学習者による
方言音声の清濁と特殊拍の聴き取り

堀　口　純　子

1. はじめに

留学生や研修生の増加，日本で働く外国人の増加，中国帰国者やインドシナ難民の定住化などにともなって，最近は首都圏以外の日本各地での日本語教育がさかんになってきている。従来，日本語教育といえば当然のように共通語の教育と考えられていたが，教科書や教室の中の日本語がそのままでは教室の外では通用しないという現実にぶつかる学習者が増えるにつれて，学習者からも教師からも方言の必要性の認識が高まり，日本語教育において方言はもはや避けて通れない問題となっている。

すでに日本語教育における方言の問題は数年前に表面化し，方言教育の必要性やそれに対する学習者の意識などについて論じられ始めていたが[1]，『日本語教育』では1992年３月の76号でようやく「方言と日本語教育」を特集している。この中では，日本語教育における方言教育の必要性を認めると同時に，日本語教育の視点からの方言研究の不足，方言の習得過程の研究の不足，方言学習に対する学習者の意識や外国人の方言使用に対する日本人の意識についての調査や研究の不足などが指摘され，その必要性が強調されている。この号の特集に関連のある論文は他の号の他の特集に比べて少ないのだが，このことも日本語教育における方言教育がまだまだ模索段階にあることの現れかもしれない。

田尻（1992）は，日本語教育における方言教育の必要性を認めながらもカリキュラムの中に取り入れにくい原因の一つとして，外国人に方言音がどのように聞こえるかという研究がまだないことをあげている[2]。そこで，1989年度に作成された全国音声データベースを利用して，日本語学習者が方言音声をどれ程度聴き取れるかということとどのように聴き取るかということを見るために調査を行った。

本稿では，この調査の結果を資料として，日本語学習者に特に困難であると考えられている清濁，促音，長音，撥音の聴き取りについて分析することにする。

2. 調査方法

文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」（代表 杉藤美代子）の成果の一つとして，音声データベースがある。これは全国各地で同一の調査項目で採録された大量の音声資料を，高品質で記録し必要に応じていつでも引き出して利用することができるようにしたもので，1992年10月現在 CD 10枚と CD-ROM 1枚が作成されている[3]。

この中で1989年度に作成された『桃太郎・天気予報』の CD に収録されている「方言桃太郎」は，同じ話の北海道から沖縄までの方言による語りを，比較的短時間に聞き比べることができる。そこで，この CD を利用して日本語学習者の方言音声の聴き取り調査を行った。CD に収録されている「方言桃太郎」は，日本の代表的な昔話の一つである『桃太郎』の次の部分を方言で話したものである。

> むかしむかし，あるところに，おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山へしばかりに，おばあさんは川へ洗濯に行きました。
> おばあさんが洗濯をしていると，川上から大きな桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。おばあさんはその桃を拾って家へ帰りました。
> おばあさんが桃を切ろうとすると，桃がふたつにわれて，中から大きな男の子が生まれました。おじいさんとおばあさんはその子に桃太郎という名をつけました。

CD には全国19地点の「方言桃太郎」が収録されているが，調査で使用したのは16地点のもので，その地点名と話者の性別および年齢は表1に示す通りである。

調査は，1週間に1回表1の上から順番に1地点ずつ「方言桃太郎」を聞いて書き取る方法で行った。被調査者は筑波大学大学院地域研究研究科の学生で，中国9名，韓国4名，台湾2名，ブラジル1名の16名である。欠席者があった

回もあり，得られたデータは1地点について13人～16人分である[4]。被調査者の日本語力は上級で，専門書を読み，講義を聞き，ゼミで発表し，修士論文を書く能力を持っている。書き取りに際しての表記はできるだけカタカナを使うように指示したが，カタカナは上級学習者にとっても使いにくいようで，ほとんど平仮名で書いている[5]。指示通り漢字は使用していない。

表1「方言桃太郎」の収録地点および話者情報

収録地点	性別	年齢
北海道名寄市	男	62
青森県五所川原市	男	68
山形県東田川郡三川町	男	77
宮城県気仙沼市	男	66
富山県東砺波郡上平村	女	65
静岡市	男	75
静岡県浜松市	男	62
愛知県名古屋市	女	76
京都市	男	63
大阪市	男	78
奈良県生駒郡斑鳩町	男	70
岡山市	男	70
島根県松江市	男	73
山口市	女	72
福岡市	男	70
鹿児島市	男	73

3. 調査資料について

『桃太郎』の話は被調査者である上級日本語学習者は全員知っていて，ＮＨＫのアナウンサーによる共通語読みの聴き取りは正しい聴き取り率（以下「正聴率」という）が平均95％であった。しかし，「方言桃太郎」には音声的にも語彙的にも文法的にも共通語とは異なる点が数多くあり，上級レベルの学習者でも難しかったようである。

本稿では，日本語学習上の困難点である清濁，長音，促音，撥音が含まれ，かつ文法的要素は含まれていない「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分を分析対象とする。

表2は共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分が各地点でどのように語られているか[6]を，形態の近いものでまとめて示したものである。なお，表1に示した16地点のうち，名寄市のCDには「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する発声がないので，本稿の分析対象からは除く。

15地点のうち，同じ形態をとるのは，「ドンブラコー・ドンブラコト」の気仙沼市と京都市と大阪市の3地点と，「ドンブリコー・ドンブリコト」の上平村と斑鳩町の2地点，共通語と同じなのは松江市のみで，表2には12の異なる形態が見られる。しかし，異なるとは言っても12の形が全くばらばらなのでは

なく，表2でまとめたように，大きく3つに分けることができる。それは，「ドンブラ」のグループと「ドンブリ」のグループとその他のグループで，「ドンブラ」のグループと「ドンブリ」のグループは，長音や促音の有無およびその位置などによって少しずつ異なる形になっているのである。

表2「ドンブラコ・ドンブラコト」の地点別発声形態

地点	発声形態
気仙沼市	ドンブラコー・ドンブラコト
京都市	ドンブラコー・ドンブラコト
大阪市	ドンブラコー・ドンブラコト
山口市	ドンブラコー・ドンブラコート
松江市	ドンブラコ　・ドンブラコト
岡山市	ドンブラ　　・ドンブラ
鹿児島市	ドンブラッコ・ドンブラッコチ
上平村	ドンブリコー・ドンブリコト
斑鳩町	ドンブリコー・ドンブリコト
名古屋市	ドンブリコー・ドンブリコート
浜松市	ドンブリコ・ドンブリコッコト
福岡市	ドンブリッコ・ドンブリコテ
五所川原市	デッタランダ
三川町	ドブン・ドブンテ
静岡市	プカーン・プカン

4. 調査結果

4.1「ドンブラコ・ドンブラコト」の聴き取り

聴き取り資料を示した表2にその聴き取り調査の結果をまとめて追加したのが表3である。「正聴数(%)」はその左に示した数の被調査者のうち正しく聴き取った人数とかっこ内にその割合を示し，「形態数」は被調査者が聴き取った形態の異なり数を示す。

まず，表3の被調査者数と正聴数（%）から，共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の聴き取りについて見ていきたい。

正聴率がいちばん高いのは岡山市の「ドンブラ・ドンブラ」の86.7%（15人中13人）で，次は松江市の「ドンブラコ・ドンブラコト」の66.7%（15人中10人）である。被調査者221人のうち正しく聴き取れたのは延べ27人（12.2%）であるが，この2地点を除くと13地点延べ191人の被調査者のうち正しく聴き取れたのは4人で，わずか2.1%である。

次に，表3の形態数から，共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の聴き取りについて見ていきたい。正聴数が1以上であれば，形態数のうち1つは正しい聴き取りの形態である。しかし，正聴数が0であれば，形態数の欄に示された数だけの異なった誤聴があったということである。

15人中13人が正しく聴き取った岡山市の3と，15人中10人が正しく聴き取っ

表3「ドンブラコ・ドンブラコト」の地点別発声形態と調査結果

地点	発声形態	被調査者数	正聴数 (%)	形態数
気仙沼市	ドンブラコー・ドンブラコト	14	0	12
京都市	ドンブラコー・ドンブラコト	16	0	9
大阪市	ドンブラコー・ドンブラコト	13	0	7
山口市	ドンブラコー・ドンブラコート	16	2 (12.5%)	4
松江市	ドンブラコ・ドンブラコト	15	10 (66.7%)	6
岡山市	ドンブラ・ドンブラ	15	13 (86.7%)	3
鹿児島市	ドンブラッコ・ドンブラッコチ	16	0	7
上平村	ドンブリコー・ドンブリコト	15	0	6
斑鳩町	ドンブリコー・ドンブリコト	15	0	7
名古屋市	ドンブリコー・ドンブリコート	15	1 (6.7%)	5
浜松市	ドンブリコ・ドンブリコッコト	15	0	10
福岡市	ドンブリッコ・ドンブリコテ	14	0	8
五所川原市	デッタランダ	13	1 (7.7%)	13
三川町	ドブン・ドブンテ	14	0	9
静岡市	プカーン・プカン	15	0	6
		221	27 (12.2%)	112

た松江市の6というのは，正しくない形態が岡山市で2種類，松江市で5種類ということになり，これは正しく聴き取れなかった被調査者は全員異なる形態で聴き取ったということである。

異なり形態数が多いのは五所川原市の13，気仙沼市の12，浜松市の10である。五所川原市は被調査者が13人なので，正しい1人を含んで全員がそれぞれ異なった形に聴き取ったということになる。

逆に，異なり形態数が比較的少ないのは山口市の4と名古屋市の5である。山口市では「ドンブラコー・ドンブラコート」を「ドンブラコ・ドンブラコト」と聴き取ったのが12人，名古屋市では「ドンブリコー・ドンブリコート」を「ドンブリコ・ドンブリコト」と聴き取ったのが11人で，被調査者の約75%が同じ誤聴をしているわけである。

4. 2　拍単位の聴き取り

「ドンブラコ・ドンブラコト」を一つの単位として見ると，表3に示された

ように，正聴率は低く(12.2%)，誤りの形態もまちまちである。延べデータ数221から正聴データ数27を引いた194が誤りで，異なり形態数112から正しい形態数5を引いた107が誤聴の異なり形態数であるが，これは1形態につき1.8人で，同じ誤聴をした被調査者が2人以下ということである。

日本語学習者の誤りには，ある程度共通性や傾向性が見られるものであるが，この調査結果からはばらばらの誤りのように見える。しかし1拍ずつ観察すると，ほとんど誤りの無い拍，誤っているがその誤り方がほとんど同じ拍，誤っていてその誤り方がまちまちの拍などの違いが見られる。そこで，以下，清濁，長音，促音，撥音という観点から，拍ごとに見ていくことにする。

4.2.1 清濁の聴き取り

表2に示した発声データの中で清濁の対立のある濁音は「ド」「ブ」「デ」「ダ」，清音は「コ」「カ」「タ」「ト」「テ」であるが，これらの聴き取りをまとめると，表4のようになる。また，半濁音の「プ」もこの表に含めることにす

表4　濁音・清音・半濁音の聴き取り

発　声	発声位置	被調査者数	正聴数	誤聴数(%)	誤　聴　音
ド	前　項	193	174	19(9.8%)	ト(19)
ド	後　項	193	172	21(10.9%)	ト(20)
ブ	前　項	193	183	10(5.2%)	グ(4)　フ(3)　プ(2)
ブ	後　項	193	182	11(5.7%)	グ(4)　フ(3)　プ(2)
デ		13	8	5(38.5%)	テ(2)
ダ		13	9	4(30.8%)	タ(3)
コ	前　項	164	157	7(4.3%)	ゴ(4)　無し(2)
コ	後　項	164	149	15(9.1%)	ゴ(6)　コー(9)
(コッ)コ	後　項	15	6	9(60.0%)	無し(9)
カ	前　項	15	12	3(20.0%)	ガ(3)
カ	後　項	15	12	3(20.0%)	ガ(3)
タ		13	12	1(7.7%)	
～ト	後　項	134	110	24(17.9%)	無し(21)
～テ	後　項	28	13	15(53.6%)	ト(5)　デ(4)
プ	前　項	15	4	11(73.3%)	ブ(11)
プ	後　項	15	4	11(73.3%)	ブ(11)

る。

「発声位置」というのは，「ドンブラコ・ドンブラコト」のように「・」で前項と後項に分けられるものについてそのどちらであるかということを示している。この欄に記述がないのは，「デッタランダ」のように前項と後項に分かれていないものである。「被調査者数」はその発声を聴き取った被調査者の数で，例えば「前項」の「ド」を例にとると，前項に「ド」という発声がある13地点の被調査者の合計で193人ということである。「正聴数」はその発声を正しく聴き取った者の数を，「誤聴数（%）」は誤って聴き取った者の数と被調査者数に対するその割合（%）を示す。「誤聴音」は誤聴の場合どのような音に聴き取ったかということを示し，かっこ内にはそのように聴き取った者の数を示す。ここではかっこ内の数が2以上のものだけを示す。「無し」というのはそれが聴き取れていないということを表す。

4.2.1.1 濁　音

「ド」は前項でも後項でも「ン」の前に現れるのが12地点，「ブ」の前に現れるのが1地点である。誤聴は，前項が193人中19人（9.8%），後項が193人中21人（10.9%）で，前項では19人全員が，後項では21人中20人が「ト」と聴き取っている。表には示されていないがデータを地点別に見ると，全員が正しく「ド」と聴き取っているのは「ドンブリコー・ドンブリコト」の上平村と斑鳩町と「ドンブリコ・ドンブリコッコト」の浜松市の3地点である。逆に，誤聴が最も多いのは「ドブン・ドブンテ」の三川町で，前項後項とも誤聴数が6（42%）である。他の地点の誤聴数は1～3なので，三川町の6は目立って多い。

「ブ」は前項でも後項でも「ン」と「ラ」の間に現れるのが7地点，「ン」と「リ」の間に現れるのが5地点，「ド」と「ン」の間に現れるのが1地点である。誤聴は，前項が193人中10人（5.2%），後項が193人中11人（5.7%）である。どのような音に聴き取ったかを見ると，前項後項とも「ブ」と調音点の同じ「フ」が3，「プ」が2で，調音点の異なる「グ」が4である。データを地点別に見ると，全員が正しく「ブ」と聴き取っているのは「ドンブラ」の系統の京都市，松江市，岡山市，山口市，鹿児島市の5地点と「ドンブリ」の系統の福岡市である。

「デ」と「ダ」は五所川原市のみで，「デッタランダ」の最初と最後に現れる。13人中誤まって聴き取ったのは，「デ」が5人（38.5%），「ダ」が4人（30.8%）である。それぞれ対立する清音に聴き取っているのは，「テ」が2で「タ」が3である。

4.2.1.2 清 音

「コ」は前項でも後項でも「ラ」の後に現れるのが5地点，「リ」の後に現れるのが4地点，そのほかに促音の後に現れるのが1地点，前項が促音の後で後項が「リ」の後に現れるのが1地点である。誤聴は，前項が164人中7人（4.3%），後項が164人中15人（9.1%）である。対立する濁音「ゴ」に聴き取ったのは，前項では4，後項では6である。後項では「ゴ」より「コー」と長音に聴き取った方が多い。

浜松市の後項の「ドンブリコッコト」の後の方の「コ」は上の「コ」と別にして表に示した。「コッ」の後の「コ」は15人中9人（60%）が聞き落としている。

「カ」は静岡市の「ブカーン・ブカン」だけであるが，前項後項とも15人中誤まって聴き取ったのは3人（20%）で，「ガ」と聴き取っている。

「タ」は五所川原市の「デッタランダ」だけで，誤りは1人だけである。

助詞の「ト」は134人中24人（17.9%）が誤り，そのうち21人が聞き落としである。また，助詞の「テ」は28人中15人（53.6%）が誤り，そのうち5人が「ト」，4人が「デ」と聴き取っている。

4.2.1.3 半濁音

「プ」は静岡市の「プカーン・プカン」だけであるが，前項後項とも15人中誤まって聴き取ったのは11人（73.3%）で，全員「ブ」と聴き取っている。

4.2.2 長音の聴き取り

表2に示した発声データの中で長音があるのは，前項の「コー」が7地点，「カー」が1地点，後項の「コー」が2地点であるが，これらの聴き取りをまとめると，表5のようになる。

表5 長音の聴き取り

発 声	発声位置	被調査者数	正聴数	誤聴数(%)	誤 聴 音
コー	前 項	104	14	90(86.5%)	コ(87) ゴ(2)
コー	後 項	31	3	28(90.3%)	コ(28)
カー	前 項	15	0	15(100 %)	カ(15)

長音の聴き取り調査の結果に共通しているのは，誤聴率が高いこと，誤りのほとんどが短い音に聴き取っていることである。

4.2.3 促音の聴き取り

表2に示した発声データの中で促音があるのは，前項が鹿児島市の「ラッコ」と福岡市の「リッコ」，後項が鹿児島市の「ラッコ」と浜松市の「コッコ」，それに五所川原市の「デッタ」で，これらの聴き取りをまとめると，表6のようになる。

表6　促音の聴き取り

発　声	発声位置	被調査者数	正聴数	誤聴数(%)	誤　聴　音
ラッコ	前　項	16	0	16(100 %)	ラコ(16)
ラッコ	後　項	16	0	16(100 %)	ラコ(16)
リッコ	前　項	14	4	10(71.4%)	リコ(10)
コッコ	後　項	15	0	15(100 %)	コ(9)　ココ(3)
デッタ		13	2	11(81.6%)	デタ(7)　デンタ(3)

長音の場合と同様に，誤聴率が高く，また誤りのほとんどが促音を聞き落としているものである。「ラッコ」は前項でも後項でも全員が促音を聴き取れず，「ラコ」と聴いている。「リッコ」は4人は正しく聴き取っているが，誤った10人は10人とも「リコ」と聴いている。「ドンブラコッコ」の「コッコ」も全員誤聴であるが，促音を聞き落とした「ココ」という聴き取りは3人で，それよりも促音だけでなく後続の「コ」も聞き落として「ドンブラコ」と聴き取ったのが9人と目立っている。「デッタ」は13人中11人（84.6%）が誤聴で，そのうち7人は促音の聞き落としで「デタ」と聴いているのだが，3人は「デンタ」と促音を撥音に聴いている。

4.2.4　撥音の聴き取り

表2に示した発声データの中で撥音は全地点の発声に含まれているが，その聴き取り結果をまとめると，表7のようになる。

表7　撥音の聴き取り

発　声	発声位置	被調査者数	正聴数	誤聴数(%)	誤　聴　音
ン	前　項	208	204	4(1.9%)	無し(2)
ン	後　項	208	204	4(1.9%)	無し(2)
ン		13	11	2(15.4%)	無し(2)

前項の撥音も後項の撥音も誤聴率は1.9%と低く，ほとんどが撥音を正しく聴き取っている。「デッタランダ」の撥音も13人中誤聴は２人（15.4%）で，「デッタランダ」の他の拍の「デ」や促音や「ダ」に比べて誤聴率は低い。

4.2.5 特殊拍の挿入

被調査者の聴き取りの中には，発声資料には無い長音や撥音や促音の挿入が見られる。それをまとめると，表８のようになる。

表8 特殊拍の挿入

発 声	発声位置	被調査者数	拍挿入形態	拍挿入形態数
コ	前 項	164	コー	1（0.6%）
コ	後 項	164	コー	9（5.5%）
ブラ	前 項	105	ブンラ	1（0.9%）
ラコ	前 項	74	ラッコ	3（4.1%）
ラコ	後 項	74	ラッコ	3（4.1%）
リコ	前 項	60	リッコ	1（1.7%）
リコ	後 項	74	リッコ	4（5.4%）
ンテ	後 項	14	ンッテ	4（28.6%）
コチ	後 項	16	コッチ	5（31.2%）
コテ	後 項	14	コッテ	6（42.9%）

長音の挿入は「コ」の後のみで，前項より後項で見られる。後項の「コ」が「コー」という聴き取りになっているのは，すべて前項が「コー」と長音になっている場合である。

撥音の挿入は松江市の１例のみである。

促音の挿入も長音の場合と同様に，前項より後項で見られる。目立つのは，「ドブン・ドブンテ」，「ドンブリッコ・ドンブリコテ」，「ドンブラッコ・ドンブラッコチ」の助詞の「テ」または「チ」の前に促音の挿入が多いということである。

5. 考 察

5.1 「ドンブラコ・ドンブラコト」の聴き取りについて

表３に示された「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の聴き取りで，

正聴率の高い地点と低い地点の発声形態について見てみたい。

正聴率が高いのは2地点で，岡山市の「ドンブラ・ドンブラ」と松江市の「ドンブラコ・ドンブラコト」であるが，この2つに共通するのは，助詞の「ト」を除けば「・」の前の前項と「・」の後の後項が同じであることと，長音や促音を含んでいないことである。逆に，1人も正しく聴き取れなかった10地点の形態に見られるのは，前項と後項が異なること，あるいは長音や促音を含んでいること，あるいは前項と後項が異なりかつ長音か促音を含んでいることのいずれかである。

CDを聞くと，どの地点も前項と後項が同じイントネーションで発声されている。「ドンブラコ・ドンブラコト」のように意味的にも構文的にも一つの単位として働いているものの場合，1拍ごとではなく一つのまとまりを単位として聴き取っているのではないだろうか。そのため，類似の形態でイントネーションが同じだと，拍数が異なっていてもその違いは聴き取れず，一方の項にあって一方の項に無い拍を聞き落としたり挿入したりすることによって，前項と後項を同じように聴き取ってしまうことが多いのだろう。また，表5や表6から分かるように，長音や促音の聴き取りは誤りが多いのであるから，それを含んだ項の正聴率が低く，含まない項の正聴率が高いのは当然のことである。

正聴率0％の地点のうち三川町だけは「ドブン・ドブンテ」という形態で，上の説明が当てはまらない。データを見ると，ここでは清濁の誤りが多く見られる。

次に，全員が異なる形態に聴き取った五所川原市と，異なり形態数が多い気仙沼市と浜松市，それとは逆に比較的異なり形態数の少ない山口市と名古屋市の発声形態について見てみたい。

五所川原市の「デッタランダ」は，前項と後項で似た形の繰り返しという形態ではない，「ド」ではなく「デ」で始まっている，2拍目が促音であるなど，被調査者が知っている共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」とはかなり聴覚的印象が異なるため，正しく聴き取ることが難しく各自がばらばらな聴き取りをしたのではないかと考えられる。

気仙沼市の「トンブラコー・ドンブラコト」と浜松市の「ドンブリコ・ドンブリコッコト」はどちらも前項と後項が異なり，一方に長音または促音を含んでいる。これが聴き取りを難しくし，いろいろな形態になっているのではないかと考えられる。

逆に，山口市の「ドンブラコー・ドンブラコート」と名古屋市の「ドンブリ

コー・ドンブリコート」は前項と後項が同じであるため，誤った聴き取りをしたにしても，「ドンブリコ・ドンブリコト」のように前項と後項を同じように誤る者が多く，そのため異なり形態数が少ないのだろう。

5. 2 拍単位の聴き取りについて

拍単位の聴き取りを示した表4～8をまとめて見てみたい。

いちばん問題があるのは促音で，促音の聞き落としが特に目立つ。共通語の学習の場合にも同様の現象が見られるが，共通語にしても方言にしても聞こえない部分を1拍としてとらえるのは難しいことであろう。また逆に，促音がないところに促音を入れた聴き取りも見られる。これが多いのが「ドブン・ドブンテ」，「ドンブリッコ・ドンブリコテ」，「ドンブラッコ・ドンブラッコチ」の最後の助詞の「テ」または「チ」の前であることから考えると，類似の形態の前項と後項が同じイントネーションで繰り返された後助詞が続くそのわずかな間に一息入れて聴き取ってしまうのではないだろうか。

長音の聴き取りにも誤りが多く，87%～100%もの聞き落としが見られる。逆に，短いものを長く聴き取ったのは5.5%とわずかである。共通語の学習の場合にも長短の区別は学習上の困難点の一つであるが，特に長音を短く聴き取ってしまう誤りは上級になってもなかなかなくならないようである[7]。

表4で目立つのは半濁音の誤聴率の高さである。日本語では半濁音を含む語そのものが少なく，日本語の教科書に提出されているのはさらに限られている。特に語頭に「プ」がつく語で教科書に出ているのは，「プレゼント」「プール」「プロ」「プライド」「プラス」「プラスチック」「プラン」「プリント」「プログラム」くらいであるから，共通語の学習でも半濁音にはあまりなじんでいないだろう。半濁音に関しては，清音・濁音・半濁音という関係よりも音声学的な無声・有声の対立の方が問題である。表4からも「プ」の誤聴はすべて「ブ」であることがわかる。

清濁の誤聴は，「ブ」を「フ」と聴いた193人中3人の1.6%から，「ダ」を「タ」と聴いた13人中3人の23.1%までで，清濁の区別が日本語学習上の困難点として強調されているわりには方言の濁音はよく聞き取れていると言えよう。また，濁音を清音に聴き取ったのは29.8%で，清音を濁音に聴き取ったのは12%である。濁音の聴き取りの方が誤聴が多いというのも共通語の学習でも見られる傾向である[8]。

撥音については，聞き落としがわずかに見られるが，ほとんど問題なく聴き取れたといってよいだろう。しかし，これは今回のデータでは「ン」に続くの

が「ブ」「ド」「テ」「ブ」に限られていて撥音の発音や聴き取りが問題になるような環境での発声がなかったからで，このデータだけで撥音の聴き取りには問題がないと言い切ることはできない。

6. おわりに

日本語教育における方言の問題が表面化してきたにもかかわらず，日本語教育や日本語学習の視点からの方言研究が不足しているという現状があること，同一の調査項目で採録された日本全国の方言の高品質の音声データベースが作成されたこと，などをきっかけとして，日本語学習者を対象に方言音声の聴き取り調査を行った。これは日本語学習者が方言音声をどれ程度聴き取れるかということと，どのように聴き取るかということを調べることを目的としたものである。ただ，毎回のCD聴取は調査のみを目的としたものではなく，共通語を習ってきた学習者に日本の各地で話されている日本語を聞いてもらいたいという意図もあった。

本稿では，昔話『桃太郎』の方言語りの聴き取りから共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分を取り出して，清濁，長音，促音，撥音に着目して分析した。その結果次のようなことが明らかになった。

1) 「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分は短いものは6拍，長いもので13拍で，平均わずか11拍の聴き取りであるが，正聴率は12.2%と低い。
2) 「ドンブラコ・ドンブラコト」の「・」の前と後のように1拍違い程度の類似の形態が同じイントネーションで繰り返されると，両方を同じ形態に聴き取りやすい。
3) 特殊拍の聴き取りで問題があるのは促音と長音で，どちらもその拍を聴き取れないという誤りが目立つ。
4) 促音や長音が無いのにあるような聴き取りをすることがあるが，これはかなり限られた環境のみに見られる。
5) 今回のデータに関する限り，撥音の聴き取りには問題がない。
6) 半濁音の「プ」を被調査者の73%が「ブ」と聴き取っている。
7) 清音と濁音の聞き分けにはあまり問題がない。

ここで明らかになったことは，5) と 7) を除けば共通語学習に見られる傾向と大差ない。5) と 7) も非常に限られたデータによるものであるから，これだ

けで方言の撥音や清濁の聴き取りに問題がないと結論づけることはできない。すなわち，清濁や特殊拍の聴き取りに関しては，方言でも共通語でも同じような困難を持っているということができる。このことは言いかえれば，方言の清濁や特殊拍の聴き取りは共通語以上に難しいというわけではないとも言えよう。

本調査の被調査者は上級日本語の学習者で，茨城県に住んで2年以上になり，他の地域に住んだことがある者もいる。しかしそれにもかかわらず，調査結果全体を概観すると，多くの誤った聴き取りが見られる。それは，方言が音声的にも語彙的にも文法的にも共通語と異なるところを数多く持っているためであろう。今後，このような共通語と異なる点を分析することによって，日本語学習者の方言聴き取り能力を明らかにしていかなければならない。

注

（1）　伴（1985），佐治（1988），備前（1991）などで論じられている。
（2）　田尻（1992）p.11
（3）　音声データベースの作成は同重点領域研究のB－1班「音声データベースの作成・保存と利用に関する研究」（代表　板橋秀一）によって行われている。
（4）　このデータは，平成2～4年度科学研究費補助金一般研究C「日本語教育におけるコミュニケーション能力養成のためのデータベース作成と利用の研究」（代表　堀口純子）の援助を受けてデータベースとして保存されている。
（5）　書き取りという方法で聴き取り能力を判定する場合，聴き取りはできても，書き取るときに表記を間違えたり，仮名では表せない発声であるためにどう表記すればよいかわからないというような問題があることを考慮しなければならない。
（6）　この表記は，重点領域研究で「高品質音声の収録と言語学的考察」を課題としているA班の各地点担当の調査者による文字化資料を参考にしている。
（7）今田（1974）　pp. 48～49
（8）林（1981）　p. 137

参考文献

板橋秀一（1989）「音声データベースの構想」『日本語学』8巻3号
今田滋子（1974）「進んだ段階における話し言葉の指導」『日本語教育』23
大坪一夫（1989）「日本語音声の教育法の開発」『日本語学』8巻3号
都　史郎（1991）「全国21地点の話者による共通語版「桃太郎」の韻律的特徴」『方言音調の諸相―西日本―(2)』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」総括班刊行書
都　史郎（1991）「方言音調の視覚化資料」『方言音調の諸相―西日本―(2)』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」総括班刊行書
国際交流基金（1986）『教師用日本語教育ハンドブック発音』
佐治圭三（1988）「日本語教育における位相の問題」『国語学』154
真田真治（1992）「方言の情況と日本語教育」『日本語教育』76

渋谷勝巳（1992）「社会言語学的に見た日本語学習者の方言能力」『日本語教育』76
杉藤美代子（1989）「現代の日本語音声研究の課題」『日本語学』8巻3号
田尻英三（1992）「日本語教師と方言」『日本語教育』76
ダニエル・ロング（1992）「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76
林　佐平（1981）「初学段階における日本語の音声教育」『日本語教育』45
伴　紀子（1985）「生活語の教育上の配慮」『日本語教育』56
備前　徹（1991）「外国人の近畿方言受容意識」『国語学』166
細川英雄（1992）「日本語教育と方言意識」『日本語教育』76